

# 幼稚園教員養成課程の教師教育の 内容に関する試論

—音楽表現を通して—

西村 順子・片山 順子・池上 敏・野波 健彦

A Study on the Training of Pre-school Teachers—through Music Expression with hand-made instruments -

by

Jyunko NISHIMURA, Jyunko KATAYAMA, Satoshi IKEGAMI, Takehiko NONAMI

(Received November 29, 1991)

## [Abstract]

One of the aims of the present revision of the Course of Study is to “put more emphasis on the education of positive attitudes toward learning and the ability to actively respond to change of society.” In other words, the revision points to the importance of having children acquire how to get actively involved in the learning process and also educating their willingness to do so itself, as well as training them to think, judge, and express themselves.

These goals are expected to be achieved not only in elementary and higher educations but also in pre-school education. To bring the active learning into practice in the latter we propose a methodology of music expression with hand-made instruments. The present paper is a report of an experiment of the method we carried out with students of pre-school education in order to let them have a direct experience of the method and think over how to achieve the goals stated above.

Key words: the training of pre-school teacher, pre-school education, music expression, hand-made instrument, the course of study

## I はじめに

新しい学習指導要領は、「幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」という答申を受けて、改訂されたものである。その改善のねらいの一つは、「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視すること」で、自ら考え、判断し、

表現したり行動したりできる豊かで創造的な能力に加えて、主体的な学習の仕方を身につけさせること、自ら学ぶ意欲を育てることなどが期待されている。<sup>12)</sup>

幼稚園などの初等段階における音楽教育では、指導計画のもとに進めていく音楽教育の方法が絶対よくないということはないが、必ずしも適しているとは言えない。ましてや、小学校で行われているような画一的な音楽教育の方法は、子どもを音楽嫌いにさせたり個人差をつくることになりかねない。初等段階にこそ、子どもたちが音に対する豊かなイメージをもてるように、音を音楽にするための基本的なソルフェージュ能力の育成を図ることが大切であり、このことは初等段階の教師にとって大きな課題であろう。

本稿は、新しい学習指導要領でいうところの、「自ら考え、判断し、表現したり行動したりできる豊かで創造的な能力」の育成を目指した、音楽教育の方法を幼稚園課程の学生に考えさせ・経験させるために、「自分たちで製作した手づくり楽器による音楽表現」を試みさせた結果の報告である。この音楽活動は、心に残った楽しい体験などを感じ・想像することによって、「音によるイメージの表現」を行うことを目指している。楽器をつくることから始まり、音を重ねたり、構成したりして、イメージを表現していくという、結果よりプロセスに注目した音楽活動である。身近な生活の中から材料（楽器）を探し、音づくりの工夫をし、作り出した音によるアンサンブルの楽しさの体験、また作品として完成したときの喜びの体験は、いずれも初等段階の子どもたちに数多く体験させたいことからである。

## II 授業の実際

### 1) 平成2年度の場合

授業者（池上）は、平成2年の6月に幼稚園教員養成課程の「音楽リズム」の授業で、「手づくり楽器の製作とそれらを中心とした音による表現」というテーマの講義を行った。その授業のねらいは、難しい音楽理論をマスターしなければ音楽創作というものはできないという固定観念を取り除き、学生たちに別の考え方による音楽的創造表現もあり得ることを示唆することにあった。このような理由から、平成2年度の場合は、詳細な記録を取っていない。そこで授業についての概要はあくまでも授業者の記憶によるものである。

#### 第1回目 手づくり楽器の製作と表現の可能性についてのコメント

第1回目の授業では誰にでも製作できる簡単な手づくり楽器の実例をいくつか提示した。そしてその中からジュースやコーラの空き缶とストローによる「缶笛」の製作と、それらの簡単な手づくり楽器による表現活動の可能性について講義を行った。

授業の開始時に学生たちにこの講義のねらいや意味を説明し、授業者が実際に製作した簡単な手づくり楽器の実例を見せて、音による簡単なパフォーマンスを行った。その上で缶笛製作のためにサイズの違う2つの空き缶を準備させた。ストローは授業者が用意し、固定するためのセロハンテープと共に配布した。説明後、学生たちは製作に入ったが、缶のどの部分にストローを固定すれば最もよい音がするか、自分の期待するような音を得るためにはどのようにすればよいかなどについて、グループ内で工夫し教え合っている光景が見られた。また、缶笛による表現（主として実際にある音の模倣）としてはどのようなものが考えられるかという質問に対して、「SL」、「鼻」などの答えが返ってきた。

その答えを受けて、授業者が考えているこれらの簡単な手づくり楽器による表現をいくつか示し、その上で2週間後にグループごとに発表するように指示し、第1回目の講義を終了した。

表現の可能性としては次のようなものを例示した。

- 1) 既製の楽曲、またはそれと同様な手法による楽曲を簡単な手づくり楽器によって演奏する。
- 2) 自然の音、人間が発する音、道具や機械や乗り物などの発する音などを、手づくり楽器を「音具」として扱って模倣し、それらの組合せによって、具体的な情景描写やシチュエーションの音による喚起を実現する。(例えば効果音のみによるラジオドラマ)
- 3) シンセサイザーと同様にこれらの音具を新しい表現手段としてとらえ、自分たちにとっては未知のこの新しい表現手段によって音楽を模索する。(とりあえずは前衛音楽のコピーでもよい。簡単な手づくり楽器が従来の調律によらない音の高さを容易に設定できることに着目しその応用を考える。)

グループ分けは、幼稚園教員養成課程で集団活動をする際の班が既に固定されているので、その班分けをそのまま流用した。また、2週間後という時間設定には特別な意図はなかった。

## 第2回目 各グループによる表現の発表

第2回目の授業は各グループ(全5班)による表現の発表にあてた。授業開始時から30分ほどを総仕上げの練習のための時間として提供し、授業者は観察にまわってみた。ただし、サジェッション、アドバイスの類はいっさい与えなかった。各班それぞれに工夫をこらして熱心に取り組んでいた。各班の代表者には題名、表現のねらいや苦労した点、特に発表の際に聴いて欲しい点などについて解説してもらい、その上で発表に移った。この発表内容の紹介とその検討・分析はⅢ章で行う。

授業者はすべてのグループの発表の後、各グループに対しての簡単な講評をし、このままの形で幼稚園の子どもに提供・提示してもおそらくあまり効果的ではないことや、幼稚園の子ども精神発達に即した与え方を各自で模索する必要があることなどについて述べ、授業を終了した。平成2年度の授業では、授業者が当初意図していた目的はほぼ達成されていた。

### 2) 平成3年度の場合

平成3年度は前年度の授業を参考に、ほぼ同様な過程で授業を行った。実施年月日は1991年6月10日、24日であった。

## 第1回目 手づくり楽器の製作と表現の可能性についてのコメント

授業内容は平成2年度に行った授業とさほど大きな違いはないので、ここでは相違点のみを提示することにとどめる。

- ① 簡単な絵、または図形のようなものを示し、それらから連想することをいくつか答えさせ、それらが発する音の表現を考えてみることをコメントした。さらにこの発展としての図形楽譜のことに簡単に触れた。
- ② 昨年度実施の際に先輩たちが行った表現例を示したが、これらの例を参考にすること、困った時に援助を求めることは止むを得ないが安易にそれに頼らないこと、出来上がったものがたとえ稚拙であろうと自分たちのオリジナリティーを持つこと、そして、それを大切なものと思う態度こそが重要であることなどについて話した。
- ③ 一貫した主張をもった表現の実現や優れた着想を残すために、メモや絵コンテのようなも

のをつくと有効であること、それらが表現をさらに高度なものにしていく時手助けになること、何らかの物語性をもっている場合には聴き手への働きかけとして有力な手段になること（イメージの喚起の手助けとして有効に作用する）をコメントし、絵コンテの製作なども配慮するとよいということを、①と関連させて話した。

学生たちの授業での反応は、どのようなものであれ自分自身の手でものをつくることはやはり楽しいものらしく、童心に帰って表情も生き生きとしていた。なお、グループ分けについては、今年度も幼稚園教員養成課程で集団活動をする際の班をそのまま流用した。また、今年度は発表までに2週間という時間を置いたが、着想を煮詰め発酵させる時間をもたせたほうがより高度のものが出来上がるのではないかという期待をこめて、意図的にこれだけの期間を設定した。

## 第2回目 各グループによる表現の発表

第2回目の授業は前年度同様、各グループ（全5班）による表現の発表にあてた。授業開始時から30分ほどを総仕上げのための練習の時間として提供し、授業者は観察にまわってみたこと、ただしサジェッション、アドバイスの類はいっさい与えなかったこと、各班それぞれに発表直前まで工夫をこらして熱心に取り組んでいたこと、各班の代表者には題名、表現のねらいや苦労した点、特に聴いて欲しい点などについて解説してもらい、その上で発表に移ったことなど、昨年とほぼ同様である。今年度は映像記録を取るとともに、発表の後で各班毎の反省を含めた話し合いの時間をとり、その話し合いの内容を表現の内容とともに簡単なレポートにまとめさせ、提出させた。このレポートの紹介は先ほどの発表内容の紹介、その分析・検討と併せてⅢ章で行う。

今年度は、共同研究に参加した教師が全員、学生に対して授業を見ての感想を簡略に述べた。最後に昨年度とほぼ同内容の注意を与えて終了した。

今年度の授業の場合、昨年度の授業とはかなり異なった観点から分析することが必要であるが、これについてもⅢ章で論述する。

## Ⅲ 結果と考察

本章では平成2、3年度に行った授業の結果を紹介し、その分析と検討・考察を行う。

まず、平成2年度の発表の内容を、授業者の感想も加えてごく簡単に紹介する。平成2年度は全5班が発表を行った。

### ① 夕立・・・

自然音の模倣。簡単な手づくり楽器各種を音具的、効果音的に使用。激しく降る雨や蛙の鳴き声の描写としてはなかなか見事であったが、それだけに終わってしまったのが少々残念であった。

### ② 夏休み・・・

ごく平均的な中学生、または高校生が夏休みのある一日の間に耳にする音を、手づくり楽器各種で表現したもの。簡単ではあるがストーリー性が

あり、構成や音の選択でかなり工夫の跡がみられた。

③ 夏・・・・・・・・

前記②グループとはほぼ同内容。しかし、音の出し方（楽器、音具の選択）やねらいとする音へのアプローチの点で②グループとは違った個性が充分に見られ、興味深かった。

④ カーニバル・・・

ブラジルはリオ・デ・ジャネイロの真夏のカーニバルを、擬音やサンバのリズムをふんだんに使って構成したもの。大変生き生きとして躍動的であり、何よりもやっている本人たちが楽しんでいたのでよかった。

⑤ 無題・・・・・・・・

得体の知れない音楽のコピー。12平均律によらない音階をもつ、ジュースの空き瓶で作った音具を中心に、その周囲に絡みの要素として各種の簡単な手づくり楽器を配したもの。東南アジアか中近東の民族音楽、またはそれを素材にした近代、または前衛音楽に近いもの、と言える。チャレンジ精神は十分に評価したいが、音楽表現としてみると少々もの足りないという印象であった。

これらを大学生の表現として音楽的にみるならば、いろいろな面で未熟であり、掘り下げて行けばさらに高度な音楽表現になる可能性は充分に考えられる。しかし、一方幼稚園での音遊びの一部と考えればかなり高度なものであると言えるだろう。

次に平成3年度の発表の内容を、授業者の感想も加えてごく簡単に紹介する。平成3年度も全5班が発表を行った。

① 夏の情景・・・

「海」と「七夕」の2曲を素材にし、歌から想像できる効果音を簡単な手づくり楽器を音具として扱うことで表現したもの。グラスに水を入れて音階をつくり、澄んだ音を得ることに成功していたが、あまりに既製の枠にとらわれ過ぎている感じが強く、かつ素材とした曲が短かったためもあり、今一步物足りないという印象であった。海、七夕の2枚の絵が添えられていたが、あまり有効に表現に作用しているとは思えなかった。

② 梅雨から夏へ・・・

音による初夏の風物詩。昨年度の例とほぼ同じようなものであったが、この班はかなり丁寧な絵を描いてきて、聴き手がそれらの絵から受けるであろうイメージを加えて全体を構成したことが特筆される。音のみを聴いているときほどでもないという気がするが、絵も含めたトータルなものとしてとらえるとそれなりの主張が感じられた。

③ 日本の夏・・・

このグループも含めて多くのグループが「夏」という題材を取り上げた。このことは季節がらということも少なからずあるだろうと想像される。この班は夏祭りに焦点を絞り、その周辺の音をかなり丹念に採集し、音具による表現に移しかえたという努力の跡が見られた。焦点（ねらい）がしっ

かりしているだけに構成もまとまっており、音のパフォーマンスとしても鑑賞に耐えるものであった。

④ 月火水木金土日の歌・・・

このグループは簡単な手づくり楽器による合奏で左記の表題の曲を演奏した。楽器としてこのような種類のものを使用すると、調律や合奏練習にかなり手間がかかり、時間と労力の割に成果が乏しいという結果になりやすいが、この班にもそういう傾向がみられた。努力と手間は評価したいが、もっと別な可能性を考えてもよかったのではないかという感想をもった。

⑤ 夏休み・・・

「子どもの時の夏休みを表現する」というねらいであったが、表現上の工夫という点では努力の跡が随所にみられた。この班で特筆すべきは動きまでも表現の一部として取り込もうとした所で、水泳や蚊を目で追うゼスチュアはかなり効果的であった。その一方で、思いつきをすべて取り込もうとしたために少し焦点が定まりにくくなったようで、その分だけ構成が散漫になりかかっているように思われたのは惜しい。しかし、訴えかける内容はかなりもっているように感じられた。



前記のように平成3年度は映像記録を取るとともに、発表の後で各班毎の、反省を含めた下記の1) から5) までの5点について話し合う時間をとり、その話し合った内容を発表の内容とともに簡単なレポートにまとめさせ、提出させた。

- 1) グループ名と構成メンバーの氏名
- 2) 発表作品の題、そのねらいと説明
- 3) 使用した道具、または楽器
- 4) 困った点、工夫した点
- 5) おもしろかった点、気づいた点、他に何かあれば自由に。

次に学生たちの提出したレポートから2例を紹介する。なお、1)のメンバーの氏名、3)の回答内容のうち、イラストレーションについては省略する。その他のものはできるだけそのまま掲載することにする。

#### 例1 前記①グループ

##### 1. グループ名

年少組、5名(女子5名)

##### 2. テーマ

「夏の情景」

波の音と汽笛の音を効果音で奏し、グラスに水を入れて音階をつくり、“海”と“七夕”のメロディーを演奏する。

##### 3. 使った道具、または楽器(イラストを描いてきたので授業者が翻案した)

カスタネット・・・ハンバーガーの入っていたようなスチロールの容器に瓶の王冠を取りつけたもの。

マラカス・・・小型の乳酸菌飲料のポリ容器2つに小豆を入れて、口どうしを合わせてセロハンテープで止めたもの。

波・・・・・・空き箱(ボール紙)に小豆を入れて傾ける。

汽笛・・・・・・授業で教えた缶笛を使用。

メロディー・・・グラスに水を入れて、はし・マドラーで軽くたたく。

簡単なグロッケン・・・金属製のフライがえしをはしてたたく。

##### 4. 困った点、工夫した点

・グラスに水を入れて音階をつくるのが、うまくいかず苦労した。

・透明感を出すためにグラスを選んだ。

・メロディーを消さないように、他の楽器の音量の調節に苦労した。

・グラスをたたく位置、たたく物によって音が変わってくるので、よりよい音を出すのに苦労した。

・波の音のリズムのとり方が難しかった。

##### 5. おもしろかった点、気づいた点、その他自由に

・音階がうまくできたとき、とてもおもしろかった。

・小豆による海の音が涼しい感じがした。

・みんなでいろいろな案を出しあって、1つのものが完成したとき、うれしかった。

・波と汽笛で海がイメージできるものなんだと思った。

#### 例2 前記③グループ

##### 1. グループ名

かぜ2組(B)、6名(男子1名、女子5名)

## 2. 作品発表のねらいと解説

“日本の夏”をテーマに江戸っ子のような雰囲気をつくりたいと思いました。“粋”にやっていたのですがなかなかままならない部分が多々あったかと思いますが、できるだけやったつもりです。しかし他の班によいアイデアも見られて、くやしいです。

## 3. 使った道具、または楽器（イラストを描いてきたものは授業者が翻案した。）

コップ（1） お湯呑（2） バケツ（1） 卵パック（1） 箱（輪ゴムをつける）  
ボンボン（2） 筆（4） ペットボトル（1） 米入りの筒（1） -イラスト付き-  
-イラスト付き-  
本（2） 口笛（3） 風鈴（1） 氷入りのコップ（1） 缶にストローをつけた  
笛（1） -イラスト付き-

## 4. 困った点、工夫した点

“お祭りらしいリズム”というのがなかなか難しかった。

構成がなかなかきまらなかった。

静かに終わった方がいいか、大きく終わった方がいいか。

出だしに何をもってくるか（風鈴、花火、お祭りばやしetc...）。

かけ声が合わなかった。

お祭りらしい音がみつきりにくかった。

高音が欲しかったのだがなかなか作れなかった。

## 5. おもしろかった点、気づいた点、その他自由に

音を発見した時感激した！！

ストーリーが決まった時構成のすばらしさに感激した。

もう少しもりあがればよかった。

花火を表現したつもりだったのだが火の玉と見えたらしい・・・。（小さな涙が二つ）

氷の音が“カランカラン”というはずだったのに、溶けてしまって“シャラシャラ”になってしまった。

ペットボトルが たたくところがついていった・・・。

しかし、とてもおもしろかったです。またやりたいです。

レポートに目を通して、発表の内容密度とレポートの内容密度との間にはやはりかなりの相関関係があるという当り前のことが確認できた。学生たちの書いてきた感想は（授業者に対する配慮もあるのかもしれないが）「楽しかった」、「おもしろかった」、「感激した」、「またやってみたい」などであり、肯定的反応が大部分を占めた。

これら発表の全10例の内容を分析すると、大きく4つに分類できる。

### 1) 自然音のかなり忠実な模倣という段階で留まってしまったもの

- ・平成2年度 ①グループ
- ・平成3年度 なし

### 2) 音による具体的なものの描写。ただし、何らかのストーリー性や聴き手に対してのイメージの喚起を目指すという点で、1) と一線を画し、発展的に評価することができるもの

- ・平成2年度 ②、③、④グループ
- ・平成3年度 ②、③、⑤グループ

3) 既成の楽曲をベースにして何らかの工夫をこらしたり、簡単な手づくり楽器で既成の曲を演奏したもの

- ・平成2年度 なし
- ・平成3年度 ①、④グループ

4) 自分たちのオリジナルの楽曲制作や、その音楽表現に関心を集中させたもの

- ・平成2年度 ⑤グループ
- ・平成3年度 なし

#### IV おわりに

前述したように、平成3年度の「手づくり楽器による音楽表現」の授業後、幼稚園課程の学生たちは、「楽しかった」、「おもしろかった」、「感激した」、「またやってみたい」と述べているが、この体験は実際に幼稚園や小学校などの初等段階で指導する際に生きてくるものと考えられる。学生たちの発表した10例の内容を分析すると大きく4つに分類できたが、いずれも表現としてみれば音楽的にはまだ未熟な面が多くあり、これからの指導次第では表現はさらに深まることが考えられる。しかし、これまでの授業では初等段階の現場へのこの方法の下ろし方、例えば、①子どもたちに楽器をつくらせることには限界があるので教師の側で楽器をある程度準備する必要があること、②子どもの自発的表現をうまく捉えて、それをある程度教師が音楽の知識と結びつけて表現へと導いていく必要があることなどについて、十分指導がなされているとはいえない。

今後、「手づくり楽器による表現」を学生たちに試みさせる段階から現場へのこの方法の下ろし方について学生たちに考えさせる段階へ、と授業を展開していきたいと考えている。

#### 参考文献

- 1) 中学校指導書音楽編（文部省）,平成元年7月,教育芸術社, p.1
- 2) 初等教育資料（文部省）,平成3年6月,東洋館出版社, p.5